



TITLE:

<シンポジウム 米英における英語教育> 米国における 'Teaching English as a Foreign Language': 特にミシガン大学の M.A.Program を中心として

AUTHOR(S):

安藤, 昭一

---

CITATION:

安藤, 昭一. <シンポジウム 米英における英語教育> 米国における 'Teaching English as a Foreign Language': 特にミシガン大学の M.A.Program を中心として. 英文学評論 1964, 15: 12-21

ISSUE DATE:

1964-03

URL:

[https://doi.org/10.14989/RevEL\\_15\\_12](https://doi.org/10.14989/RevEL_15_12)

RIGHT:

「ヤクに立つ英語」しか教えることができないからである。誤解されると困るが、私はここで中学の先生のことを云っているのではない。ただ習う者の立場からして、中学生の能力としては、「ヤクに立つ英語」しかおぼえることができないのではないかと云うのである。ヤクに立たない(?)英語——英文学だとか英米の教養人の用いる英語——は、大学の教養英語にまたねばならないのではないかということなのである。]

## 米国における

### ‘Teaching English as a Foreign Language’

——特にミシガン大学の M. A. Program を中心として——

安 藤 昭 一

米国における英語教育について述べるのが、このシンポジウムに於ける私の分担課題であるが、時間の制限のためテーマを次のようにしぼりたい。即ち、先ず第一に米国における Teaching English as a Foreign Language という概念と実体を略説し、その中で M. A. Program の位置づけをする。次に私の最も詳しいミシガン大学の M. A. Program を紹介しつつ、その特徴を考察する。そして最後に、それとの対比において、わが国の英語教育の問題点を指摘する。限られた時間内で、米国の英語教育一般についても語り、かつ問題の中心を逃さないためには、このような説き方をするのが最善だと考えるからである。

さて English as a Foreign Language という概念は、一方において English as a Native Language と対立し、他方において English as a Second Language と相対する。母国語としての英語教育は言う迄もなく国語教育の分野に属し、間接的にわが国の大学等における上級クラスの英語教育の参考に資すべき点はあるが、直接的には外国語教育の分野より外れるので、ここでは取りあげない。従って以下で英語教育とだけ呼ぶ時も、外国語としての英語教育を指しているものと解していただきたい。

次に、English as a Foreign Language と English as a Second Language とは、今なおアメリカでも混同して無差別に使われている場合が多いけれど、ミシガン大学では

Teaching English as a Second Language とは云わない。Second Language とは First Language に対する概念であって、bilingual な人が母国語同然に使う言語を意味すると考えるのが妥当だとする区別を設けているからである。アメリカ言語学会会長 Dr. Albert H. Marckwardt も、1962年度の MLA 年次大会で “English as a Second Language and English as a Foreign Language” と題する講演を行ってその区別の必要性を説いたから、やがてアメリカで Teaching English as a Foreign Language という言い方に統一される日が来るであろう。

さて本来ならば、Teaching English as a Foreign Language が外国語教育の分野に属するものである以上、先ず米国における外国語教育の歴史と現状を説明することから始めるのが順序であろう。しかし今はただ、次の二点——即ち、第一次大戦中に外国語を排斥したアメリカが第二次大戦では、日本語、ビルマ語、ロシア語等を含む諸外国語を、当時既に ACLS (The American Council of Learned Society) で確立していた新しい言語科学に基づく教授理論——linguist と informant が協力して intensive に教授することを中心とする理論——を採用して、軍の将校の為に ASTP (The Army Specialized Training Program of “language and area studies”) ——俗に ‘Army Method’——の計画を行い、100 を越える大学の協力を得てかなりの成功を修め今日の外国語教育の基礎を築いたこと、——第二に米国における外国語教育の現状としては、1958年に議会を通過した DEA (The National Defense Education Act) により、いわば国策として、外国語教師の再教育、Language Laboratory の設置等が大規模に進められ、1963年現在で外国語をとっている小学生の数が100万を越えている<sup>\*</sup>ということ、——これだけの指摘にとどめて、その詳細は別の機会にゆずらなければならない。

そこで、アメリカにおける Teaching English as a Foreign Language の実体であるが——これには所謂 Intensive Course in English と Teacher Training Program の二種類がある。前者は語学力不十分な外国からの留学生及び移民を対象とした短期間の集中講習で、ミシガン大学の場合を例にあげると、ELI (The English Language Institute) において oral approach の原理に基づく一日五時間の授業を8週間(1963年9月よりは16週

---

\* *Saturday Review*, Feb. 16, 1963, p. 66.

間のコースと二本立てで)行っている。クラスは約10名ずつにわかれ、クラス外活動も活潑で、原則として受講生は寝食起居を共にすることになっている。他方 Teacher Training Program とは、外国語としての英語教師を養成する計画のことであるが、そのカリキュラムの一部として、定期的に Intensive Course の授業を closed circuit television で参観し、教材、教授法、テスト等について研究している。そこで Intensive Course のこれ以上の説明は省略して、Teacher Training Program の問題に入っていこう。

アメリカの大学で外国語としての英語の Teacher Training Program をもっているのは、私の知る限りでは、The University of Michigan; Columbia University; Georgetown University; American University; UCLA; The University of Texas 及び The University of Hawaii である。そのカリキュラムは大学により一様ではない。例えば、教育実習を課しているのは Columbia だけのようだし、M. A. コースの最低年限も Michigan の1年に対して Hawaii は2年（内 1 semester はアメリカ本土の大学に留学）といった具合。しかしその大綱において大差がある筈はない。そこで以下、ミシガン大学の場合に限って説明しよう。

ミシガン大学には、この Teacher Training Program に non-credit のコースと M. A. コースの二つがあり、内容、目的ともかなり違ったものになっている。そして広い意味では両者とも Teacher Training に違いないけれど普通狭義に解して、前者の non-credit コースをのみ Teacher Training Program と呼び、後者はただ M. A. Program とだけ呼んでいる。その目的の違いは一言で言えば、前者が英語教師を養成することを唯一の目的としているのに対し、後者は、英語教師を養成する資格のある英語教育研究者を育てることをねらいにしていると言ってよからう。

Non-credit の Teacher Training Program は、諸外国から来た中学、高校の英語教師を対象とし、ELI において一学期間（16週間）英語教育の理論と實際を教授し、修了者には certificate を与えている。一方 M. A. Program の方は、English Proficiency Test に92点以上とったものだけを、ELI ではなく大学院の full-time student として、30単位を一年間（1st semester, 2nd semester, summer session）でとれる仕組みにし、平均成績 B 以上の者に Master's Degree in English Language and Literature を与えている。以下もっぱら此の M. A. Program について述べるが、それは私がその経験者として内

容を熟知しているということの他に、以上説明してきた M. A. Program の位置づけからもお分りいただける如く、これを述べるのが、つまりは、外国語としての英語教育に対する米国における考え方の一歩の根本を究明することになり、その特徴と研究の現段階を明らかにすることが出来ると信ずるからである。

もっともこの M. A. Program には、外国人学生の他にアメリカ人学生もいて、その両者の間でとるべき課目が完全に一致しているわけではない。しかし共通の課目が大半を占め、カリキュラム編成の原則は同じとみてよいので、私が1962年9月より1963年8月までの一年間にとった課目について説明することとする。なおついでに言えば、1962年度は外国人学生約30名に対しアメリカ人学生約10名で、夏の学期だけは、アメリカ人学生数が2倍位に増えた。最近アメリカでは、外国へ英語教師として出かけるのが将来性ある職業だとして PR されているので、この program に登録するアメリカ人学生の数も増大する傾向にある。

そこで次に、私のとった課目であるが……

#### First Semester

English: Phonetics

English: Introduction to Linguistic Science

American Studies: Readings in American Civilization

Japanese: Studies in Japanese language

#### Second Semester

English: Modern English Grammar

English: Teaching English as a Foreign Language

American Studies: Readings in the Literature of the United States

Education: Teaching of Modern Languages

#### Summer Session

English: American English

Education: Special Problems in the Teaching of English as a Foreign Language

Japanese: Structure of Japanese Language

以上の11コースである。一学期、二学期が1コース当り3単位（週3時間を16週）夏の学期が1コース当り2単位（週4時間を8週）で、合計30単位。この中7コースが必須、他は選択であるが、私の場合、すべて指導教官のサジェスションによってとった。

さてそれでは、M. A. Program of Teaching English as a Foreign Language におけるカリキュラムの中味が上の11コースであるということにどういう意味があるのか。今一度この11コースの題目をみてみると、それが次の4つの分野に整理出来ることが明らかとなる——即ち、1) Linguistics, 2) English Teaching, 3) American Studies, 4) Japanese Language の4分野である。従って問題は、M. A. Program にどういう理由でこの4分野を含ませているか、ということになり、その理由を明らかにすることによりアメリカに於ける外国語としての英語教育に対する考え方の基本を明らかにすることが出来ると私は考えている。

そこで次にその一つ一つについて見ていきたいのであるが、その前に、各コースの内容の概略についても知っておく必要があろう。しかし今はその説明をしているだけの時間の余裕を与えられていないので、一つの便法として、私が一年間のうちに、各コースのテキストとして或いはリーディング・アサインメントとして課せられ、少くとも一度は通読した参考書目名と、屢々参照した2, 3の雑誌名とを、4つの分野別に列挙してみることにする。それによって内容の概略を推察していただきたい。（\* 印をつけたのは、特に念入りに2度以上読んだもの）

#### Linguistics :

\* Sapir : *Language*.

\* Fries : *American English Grammar*.

\* Fries : *Structure of English*.

W. N. Francis : *Structure of American English*.

\* Paul Roberts : *English Sentences*.

\* H. King : *Guide and Work Book in English Syntax*.

\* A. A. Hill (ed.) : *Third Texas Conference on Problems of Linguistic Analysis in English*. (特にこの中の Noam Chomsky, “A Transformational Approach

to Syntax ”)

\* H. A. Gleason : *An Introduction to Descriptive Linguistics*.

\* Pulgram : *Introduction to the Spectrography of Speech*.

Heffner : *General Phonetics*.

Pike : *Phonetics*.

R. H. Stetson : *Motor Phonetics*.

Jakobson and Halle : *Fundamentals of Language*.

\* Robert A. Hall, Jr. : *Linguistics and Your Language*.

\* Marckwardt : *American English*.

Babcock : *The Ordeal of American English*.

Mencken : *The American Language*.

Pyles : *Words and Ways of American English*.

Kurath : *Handbook of the Linguistic Geography of New England*.

Kurath : *Linguistic Atlas of New England*.

Kurath : *Word Geography of the Eastern United States*.

LANGUAGE

PMLA

English Teaching :

\* Lado : *Linguistics Across Cultures*.

\* Fries : *The Teaching and Learning of English as a Foreign Language*.

ELI : *Pronunciation ; Vocabulary ; Sentence Patterns ; Pattern Practice*.

LANGUAGE LEARNING

American Studies :

Oscar Handlin (ed.) : *American Principles and Issues*.

*The Complete Short Stories of Mark Twain* (Bantam).

Nathaniel Hawthorne : *Selected Tales and Sketches* (Rinehart).

Ernest Hemingway: *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories* (Scribner).  
*The Mentor Book of Major American Poets*,

Japanese Language :

\* Bernard Bloch: *Studies in Colloquial Japanese*.

Samuel E. Martin: *Morpho-phonemics of Standard Colloquial Japanese*.

Eleanor Hartz Jordan: *The Syntax of Modern Colloquial Japanese*.

その他、服部四郎『音韻論』、金田一春彦「日本語のテンスとアスペクト」、『世界言語概説』の「日本語、琉球語、朝鮮語」、『国語学辞典』の「国語史」(築島裕、中田祝夫)、「国語音韻の変遷」(橋本進吉)等。

さて上の4分野のうち、English Teaching の分野に関してだけは設置理由が余りにも明白である。この分野を除外した英語教育のカリキュラムなど考え得ないし、更に私はうかつにも、ミシガンへ行く迄は、もっぱらこの分野のことだけをやるのだらうと思い誤っていた程である。だが他に、上述の如く、Linguistics ; American Studies ; Japanese Language の分野があった。それは何故か。

コース数から言っても、参考書目から見ても、Linguistics を極めて重要視していることが明らかである。その理由はひとえに、language teaching を Applied Linguistics の一つとして位置づける考え方による。Applied Linguistics には、speech correction ; machine translation ; international language の研究などがあるが、同様に language teaching も Applied Linguistics の一つであり、従って応用科学の基礎になる科学原論を重要視するというわけ。これが、アメリカの英語教育の第一の特徴だと思う。

そして Linguistics の分野において、言語に対する三つの考え方から生ずる三つの文法体系—— 1) Remedial Grammar, 2) Descriptive Grammar, 3) Generative Grammar について比較研究した。その詳細については本論のテーマからも外れることになるので説明を省略するが、ただ英語教育との関連についてのみ略説すれば、1) の Remedial Grammar はラテン語文法をもとにして作られた所謂「伝統文法」で、Prescriptive Grammar とも呼ばれる如く、絶対的規範を定めて usage を矯正することを目的としている。



また別名 School Grammar と呼ばれることから分るように、これが永らく英語教育の中心を占め、わが国では今日に至るもなお、主流はこの Remedial Grammar に依っていると見てよからう。

ところが米国においては既に30余年前より、Sapir や Bloomfield の科学的言語研究が確立され、Remedial Grammar の批判の上に立って、2) の Descriptive Grammar が作られた。Remedial Grammar のいう規範性には科学的根拠がなく、それで usage を律することは無謀でもあり、又英語教育の実際経験に照しても失敗に終わったというのである。そしてそれに代って、usage をのみ重要視し、usage を科学的に観察し分類し記述していく立場をとる。アメリカ英語に於ける usage の研究と Remedial Grammar への批判は、Fries の *American English Grammar* に詳しく、文法の新しい体系づけは Fries の *Structure of English* が参考になろう。そして英語教育への応用においても、この新しい言語科学にのっとって、Oral Approach の原理がうちたてられた。

3) の Generative Grammar は、ここ数年来にわかに盛んになってきた極めて新しい文法理論で、MIT の Chomsky を頭としている。大変難解であるが私の理解し得た限りでは、Descriptive Grammar において言語の体系づけが、Phone—Phoneme—Morpheme—Syntax というふうに、観察し得る言語の外形から進められるのに対し、Generative Grammar では文法を native speaker の頭の中の働きそのものだと見る。そしてその働きを機械で行わしめるとすればどうなるかと問い、その機械は必要に応じて無数の English sentence を生み出すことが出来、その中に一つの non-English sentence をも含まないものでなければならないと考える。ところでそういう機械は極めて複雑な構造を必要とするであろうか。この問には、native speaker が僅か四、五歳にして文構造を習得するところから見て、普通考えられている程複雑なものである筈がないと答え、その仕組みを、Kernel Sentence と Transformed Sentence の二つに整理する。従って Generative Grammar における rule としては、Kernel Sentence を作り出す為の Phrase-structure rules と、Kernel Sentence より Transformed Sentence を作る Transformation rules、そしてそれを phoneme に変えていく Morpho-phonemics の rules が立てられている。

まことに中途半端な説明で終えねばならないが、私の云いたいのは、米国において language teaching を Applied Linguistics として位置づけているということ、従って英語教

育の原理や方法も、Linguistics の進歩につれて絶えず改善され得るものだということがある。現に、Generative Grammar を英語教育に応用すればどうなるかということが、相当問題になっており、私も大いなる興味をもって、その方面の研究にとりかかっている。が、何度も繰り返すけれど、language teaching を Applied Linguistics だとする考え方は極めて重要で、ここに米国における英語教育の第一の特徴があると思うのである。

次に、American Studies の分野を設けていることについてであるが、これは英語教育における言語的側面の他に、文化的側面を重要視しているためであり、ここに第二の特徴がある。

最後に、アメリカに行って日本語を学んだという一見奇妙な現象は、私が第三の特徴と考える Contrastive Analysis に必要な為であった。詳しく言えば、言語科学の立場より、言語の習得とは一つの無意識的乃至半無意識的習慣の形成だと結論し得るのであるが、してみれば、外国語を学習する場合には、既にある母国語の習慣の上に、更に新しい今一つの習慣を作りあげることになる。そしてその場合、二つの習慣が微妙に影響しあって、ある時には新しい習慣の形成を助け、ある時にはそれを阻止して所謂学習の trouble spot を形成する。これを結果的に分りやすく言えば、アメリカなどでいろんな国の留学生が話す英語を聞いていると、その国独特のなまりや誤用があって、これは日本人の英語、あれはフランス人の英語という風に忽ちに見破られる。これが即ちそれぞれの母国語のパターンが英語の中に持込まれている結果であり、母国語が違えば英語学習の trouble spot も違ってくるといふことの証拠である。従って、英語教育の教材は、学習者の母国語別に、その母国語と英語との綿密な contrastive analysis に基づいて作りあげる以外に正しい方法はなく、そのため M. A. Program においても、日本人は日本語を、中国人は中国語を、ポーランド人はポーランド語を、アメリカ人は将来自分が教えに行く国の言語をそれぞれ分析して、contrastive analysis を試みたのである。

さて以上で M. A. Program における 4 分野の設置理由と、そこに見られる三つの特徴を述べ終ったのであるが、私はこの Program を卒業して、以前には考えも及ばなかったような新しい研究分野に目を開かれると共に、ミンガン大学におけるこの方面の研究の段階がまだまだ未熟であることをも合せ知った。例えば日本語と英語の文構造の contrastive analysis も完成していないし、oral approach における pattern practice と situa-

tion の結びつけも十分ではない。それに oral approach はあく迄も英語学習への approach の第一段階のことであって、日本の大学におけるような advanced class の扱い方ということになると、誰からも満足な答を得られない。英語教育の文化的側面ということにしても、言語的側面との関連の具体的研究がない。文化面における contrastive analysis も必要な筈であるが未だなされてはいない。前述した Generative Grammar の応用も今後のこと、等々。

初めの予定では、最後にわが国の英語教育の問題点を具体的に指摘するつもりであったが、ここまで述べ来って考えてみれば、わざわざそうする迄もなく、問題点は既に明らかであり、ただ一言、何はともあれ一日も早く英語教育を学問研究の対象にせよ、と警告すれば足りると思う。そしてそれにつけても私は、今後なすべく背負わされた問題が余りにも多いのに驚いているのである。

## 米国における英語の試験

大 浦 幸 男

試験というものは、単に個々の学生の学習の結果をテストするだけのものではなく、試験の形式や、内容が、その科目の学習上の目標を示すものだから、極めて重要な意義のあるものというべきである。例えば、わが国において、大学の入学試験が高校の教育に大きな影響を与えていることは、否定しがたい事実だ。筆者は、1963年1月30日に渡米し、約三カ月間、外国語としての英語教育の実状を視察したが、その際に興味をもって調査したことの一つに、米国における英語のテストの問題があったから、その概要を次に述べることにしたい。

まず、筆者が最初の七週間を過した UCLA (University of California at Los Angeles) は、創立は新しいが、近年急速に拡充しつつある米国西海岸有数の大学であって、外国人留学生は多数にのぼり、日本人学生も百人以上いた。ここでは、外国人留学生はすべて入学の初めに、英語のテストを受けねばならぬ。その成績に従って、英語の履修の有無、及